

はじめに

本書は一九三二年立憲革命を起点とし、各行為主体の政治思想の交錯を通じてタイにおける民主化という現象を捉えようとしたものである。本書を書くにいたった最初の動機は、アジア経済研究所の海外派遣から帰任する一週間前に起こった九一年二月二三日のクーデタの体験、そして翌年、軍と市民が衝突した九二年五月流血事件の発生であった。

一九九一年クーデタの日の朝、筆者はたまたまバンコク北方のノンタブリ県からバンコクに通じるクルンテープ・ノンタブリ通りを全速力で疾走していく戦車を目撃した。慌てて家に戻ってテレビをつけると、政府マスコミ公社系の三、九チャンネルは映像が映らず、他方陸軍系列の五、七チャンネルは通常の放送をしていた。夕方になって軍の広報官が時折登場して国家秩序維持評議会(NPKC)の布告を読み上げるにいたって、ようやくクーデタの発生を知った次第であった。さらに軍と市民が衝突した九二年五月流血事件の二週

間前、バンコクに滞在していた筆者は、官庁や軍関係の機関があるバンコク旧市街の金行（金製品を売る店）が軒並み営業を停止しているのを見て店の主人に尋ねると、「お上から店を閉めるよう指示があった」との返答があり、不穏な気配を感じていた。しかしその直後流血の惨事に発展するとは予想だにしなかった。

予期せぬ展開を目の当たりにして、筆者はこうした現象がなぜ起こったのか検証してみたいという思いにかられ、在タイ日本国大使館専門調査員在任中にインタビュー調査をすることからとりかかった。一九九三年七月、曹洞宗国際ボランティア会の秦辰也氏の紹介でクロントイ・スラムの住民に対するインタビューを行った際、ある青年がクロントイから少なくとも五〇〇〇人が民主化デモに参加していたと語ったのが印象深かった。また九四年二月に東北タイのNGOや農民運動のインタビュー調査を行い、九二年の民主化運動が地方のNGOや農民にまで広がりをもった運動であったことを実感した。九三年十月十四日にタマサート大学で行われた七三年学生革命二十周年の記念行事でたまたま知り合ったある男性は、九二年五月流血事件の際警官から警棒で殴られているところを写真に撮られ、『ニューズウィーク』誌の表紙になったという経験の持ち主であったが、彼は東北タイ出身でNGO活動に参加していると言っていた。本書では途上国における民主化運動の中心的な担い手が都市の新中間層だとする最近の近代化論の見解に対し、若干の疑問を呈し

たつもりである。

また経済がある一定レベルに達すれば市民がある日突然民主主義に目覚めるといふものではなく、民主主義や自由を求める圧力は歴史上常に存在してきたことを忘れてはならないとも実感した。例えば第二次世界大戦直後のヨーロッパでは東ベルリンやハンガリーでソ連の支配に抵抗する市民の運動が散発的に起こっていた。タイでは五月流血事件で「民主擁護戦線」と書かれた黒ハチマキをした謎の一人の指導者が、一九五〇年代のピブーン元帥の時から反軍の運動をしていたと言っていた。さらに三二年立憲革命の後、欧米流の民主主義がエリート層の一部に根付き、その影響力が七三年学生革命や九二年五月流血事件にまで持続していた。したがって最近の民主化運動の潮流をその国の歴史的な文脈のなかに正しく位置づけることが重要であるという点をここで強調しておきたい。さらに天安門事件をみてもわかるように、民衆側の力のみでは変化は達成されず、他方フィリピンの八六年二月政変やタイの五月流血事件の事例のように、民主主義をめぐって権力の側に態度の相違が生じた時に民主化の動きが加速されるという点も本書で指摘しておいたつもりである。

次に強調しておきたいのは、民主化について比較的開明的な思想をもっていたプミポン国王の存在である。国王のこうした思想は、アメリカで生まれスイスで勉学を積み、欧米

生活が長かったという環境が影響しているのかもしれない。プミポン国王は一九四五年にスイスのローザンヌ大学に入学、当初は自然科学を専攻していたが、兄君のラーマ八世の急死に前後して社会科学に転じている。またプミポン国王は九四年にユーゴスラビアのチトー大統領の伝記本『テイトー』をタイ語に翻訳している。第二次世界大戦前後をヨーロッパで体験、ドイツのユーゴ介入をはじめナチスのファシズムを目の当たりにして平和の重要性を感じ、さらに八〇年代末の冷戦構造の崩壊による国際秩序の変化と民主化の大きな潮流が起こったことがこの本の出版の背景にあるものと思われる。

さらに開発政策におけるプミポン国王の役割も見逃すことができず、地方開発や都市交通政策における国王の発言は政府の政策決定過程においてきわめて重要な位置を占めている。アーナン元首相によれば、一九六〇年のアメリカ外遊から戻ったプミポン国王が政府に第一次経済社会開発計画（一九六一〜六六年）についての助言を与えたのだという。九二年五月流血事件が国王のお膝下の王宮前広場そしてラーチャダムヌーン（行幸）通りという舞台空間で起こり、国王が最終的な調停者となったことは記憶に新しいが、六〇年代に起こったこのこと一つをとってみても、タイ現代史においてプミポン国王が果たした役割はきわめて重要なものであるとあらためて痛感される。この点を再評価し、隠れた行為主体として捉え直していく必要があるものと思われるが、これは今後の筆者の課題としていき

たい。

一九九二年五月流血事件を転機にタイ社会は大きく変化しようとしている。経済発展のパターンをとってみても転換点にさしかかっている。他の東南アジア諸国同様、六〇年代以降のタイは低賃金政策を輸出に結びつけるという工業化パターンをとってきた。しかし今後タイの輸出伸び率は低下し、経済成長における輸出の寄与度は低下していくものとみられる。逆に国内市場が成長において重要な役割を果たすことになる。ここでは国内所得格差問題の解決が、ひいては地方分権や民主化の問題が焦眉の急となるのである。こうしたタイ社会の変化を考えるうえで、本書がなんらかのヒントになれば幸いである。

本書の執筆にあたっては、専門調査員として御世話になった在タイ日本国大使館、インタビュ調査に応じて下さった方々のご厚意、そして草稿の通読をいただいたアジア経済研究所の林俊昭氏と古田幹正氏の貴重なコメントなど、数々の方々のお力添えがある。記して御礼申し上げたい。

最後に本書の出版を可能にいただいたアジア経済研究所、学生時代の恩師である二宮哲雄先生と故松本通晴先生に感謝の意を表したい。

一九九七年三月